

勝林寺寺報

白業白得



「昔から病気について「自業自得」論が言われる。タバコを吸う人が肺ガンや心筋梗塞になるのは自業自得。酒を飲む人が肝臓を壊すのは自業自得。

しかし医療の側から見ると、ものごと、特に疾病がおこるのは、特定の一つの原因によるというそんな単純なものではない。病気がおきる経過も原因も、非常に複雑で簡単にはこれと言い当てる事が出来ない場合がほとんどです。甘いものばかりたべていると糖尿病になるとよくいわれることがあります。甘いものを沢山食べたからと言って、必ず糖尿病になるとは限りません。確かにカロリーの過剰摂取は糖尿病発症のリスクの一つではあります。が、たくさん食べても糖尿病にならない人も沢山います。遺伝的な因子や運動量など、いろんな要素が複雑に絡みあって、食事内容が同じでも糖尿病になる人もならないひともいます。心筋梗塞も然り癌もしかり。ある特定の条件に合致するとこの病気になるぞ、尿病、肺ガンは自業自得だからそんなものに莫大な医療費を費やすのはいかがなものか、と言うに至つては、正しい間違つていいかの判断を、好きか嫌いかの感情にすりかえて言つてはいるように思えます。

お釈迦さまがいらっしゃったころインドには「ものの出来たち」「いのちの存在」についていろいろな自由思想家が沢山いました。一一因の計」とよばれる一群の思想家は、特定の原因でものは存在する(一因一果)と論じました。煙草を吸うから肺ガンになる。この世の悪業が未来の不幸な結果をまねく等。



ふよう

お釈迦様が悟られた如実知見(「さとり」)は「縁起」(ラチャイダジンバード)。すべてのもの(「因縁仮和合」)という「存在の眞実」。これをさとったのがお釈迦様でした。

このことは仏教の人間観でもあります。因縁生の義」と言っています。無量百千の条件のからまりあいのなかで存在し得ているもの。

なわち仏教では「もの」を「衆生」と呼びます。中国の淨影という偉いお坊さんは「衆多因縁生の義」と言っています。無量百千の条件のからまりあいのなかで存在し得ているもの。

例えば「わたしの命」。

わたしが今ここにあるのは最低両親がいたから。両親もまたそれぞれ祖父母四人を条件として存在した。最も単純にそのような計算をしてみると二十代遡ってみても一千四万八千五百七十六人の影響力が一人でも欠けては私ひとりの存在は成り立たない。三〇代前と後でしてみると二十四億余りの祖先を数えることになる(そのなかには善人も悪人もいるはず)。それがまた狭い日本でからまり合っている。親鸞は「四海のうちみなきょうだい」といつてはいるのはこの事実。

ところがこの事実をいつのころからか「好き嫌い」「都合がいい、悪い」分別してしまった。無量の条件(祖先)のなかから自分に都合のよい判断で選別して(自己中心の判断)、血筋・血統・家柄など極めて差別的な線引きをしたのである。皇統無窮・金鴻無欠(きゆうむくせん)。万世一系など、特に明治以後の天皇制社会では「ひんまがつた祖先觀」が横行していったのだ。

「祖先供養」が宗教の役目。事実をひんまげて自家の伝統を誇示し、暗に人を差別するよ

母の残した教え

人がが悪ない
わが車わるい

わたしの母が亡くなったのは昭和十年の節分の日であった。わたし十歳。その三年前の夏、父が京都の病院で死んで

わたしの家の浄土真宗の寺であったので、住職亡き後すぐに母は得度して、里の祖父母に応援されながら檀家の勤めをして、夜自転車の稽古をして、犬をお供につれて夜遅くまで檀家廻りをして、いた姿は今もハッキリ覚えている。

その忙しさの中での子育ては並大抵ではない。おはなしも祖母や他家(まご)のおばさんだつたのは、母から子守歌を聞いた覚えはない。親鸞は「四海のうちみなきょうだい」といつてはいるのはこの事実。

唯、母の肉声で覚えているのは、この歌だけ。生活のどういう場面で歌つていたのか定かないが、母の死後、何人かの方から「この歌、おかあさんから教えてもらつたよ」と言われた。だから、息つく暇もない忙しい日々、耐えて励んでいたのだろう。当時一般に、家庭の「女」は、このよう自分を責めながら卑屈に生きねばならなかつたのか。

「屏の角の章」

お釈迦さまのなまのことばを集めた「スッタニパーター」(「經集」)のことばを、母のこのことばと重ねて思う。

お釈迦さまの腹が立つ、いらいらする。自分の思いにそぐわない人とを非難したり恨んだり、怒鳴りつけたくなつたりもする。自分で我執、自己本位、で、それ自らくらんでいる毎日。

お釈迦さまのなまのことばを集めた「スッタニパーター」(「經集」)のことばを、母のこのことばと重ねて思う。

十一月 師走 のこよみ

奥小谷報恩講
太田・東里報恩講
坂本寿子さま一周忌
唐川報恩講
小田報恩講
小田報恩講(托鉢)
野尻・矢根報恩講
矢根報恩講
出合報恩講(懇講)
丸中・片間報恩講
東里懇講
読み聞かせ

一日 奥小谷報恩講
二日 あすなろ(録音)
太田・東里報恩講
坂本寿子さま一周忌
唐川報恩講
小田報恩講
小田報恩講(托鉢)
野尻・矢根報恩講
矢根報恩講
出合報恩講(懇講)
丸中・片間報恩講
東里懇講
読み聞かせ

十七日 沢田定男さま忌明法事
十八日 丸口同凡役員会
十九日 口小谷報恩講(懇講)
二十日 横山豊さま忌明法事
二十二日 斎藤アヤ子さま一周忌
二十三日 豊岡報恩講
二十六日 みのりを聞く会
二十七日 口小谷報恩講
二十八日 あすなろ(編集)
二十九日 横山豊さま忌明法事
三十日 斎藤アヤ子さま一周忌
三十一日 みのりを聞く会
除夜会
年末大掃除

母の残した教え II

母に添い寝をしてもらった覚えはない。
子守歌だけはだれに聞いたのか、それはなん
となく覚えている。誰から聞いたのだろうか、それはなん
今ではわたくしひとりしか知らない古い古い子
守歌である。

柴の折り戸の賤が家に、翁とおうなが住まい
ける。翁は山に柴かりに、おうなは河に綱すすぎ
流れながら水の瀬に、流れきたれる桃の実の世にたぐいなく太ければ

母は、こどもを寝かしつけるとき、古いこの歌と一緒に、日本の古典を読んで聞かせていた
に違いない。母がなくなつてずっと後に、私は、不思議と、自分で一度も習つた覚えのない「徒然草」や「竹取物語」や「更級日記」の冒頭の部分が、スラスラと、口をついて出てくる。中学校の先生から「お前なんで」と指摘され、「わたくし自身も驚いたことがあった。そののち大分たつて、蔵の掃除をしていたとき、母が嫁入りのとき持つてきただ荷物のなかに、「日本古典文学選書」の何冊かが見つかった。わたくしは今も古典を読むのが、いわば趣味。まことに学習したのではなく、母はこのように忘却のかなたに消えてなくなつていている。



—ダリア—

念佛もうさるべし

本願寺第八代目の門主であった蓮如上人。その蓮如上人の一生の業績や言行を記録した『蓮如上人ご一代記聞き書き』の一巻最初

「第一条」に、次のような話がのっている。

明応二年と言つから一四九三年。蓮如上人もそのとき七十九歳のお年より。その年の正月一日。山科の勧修寺村の道徳というお弟子が早々に山科本願寺までご挨拶に参上してきた。

道徳というそのお弟子も、蓮如上人より年下とはいえ既に七十歳は越えていた。当時の平均年齢はどれくらいであったのか、とにかく二人ともに超後期高齢者であったことは間違いない。

その二人が対座したのだ。そして、そのときにかく二人ともに超後期高齢者であったことは間違いない。

蓮があつたやにわに蓮如上人が声をかける。

「道徳はいくつになるぞ。道徳、念佛もうさるべし」

なんとも笑つ懼貪のように聞こえるが、わたしには、如何にも蓮如上人らしい味わいのある一場面と感じられる。

父は2年前に死んでいます。母もそれから一年お会いは別れのはじめ何年かまえ祖父の法事にお参りしたとき、この人生無常、しかしその無常の事実を身をもつて今も教えてくれている母を持ったことの貴さを、愚かな私もしみじみ思うこのごろです。

人生無常、しかし何年かまえ祖父母を見せてもらいました。

七十も過ぎれば、一年一年が「山坂越える」思いがする。喘ぎ喘ぎの人生である。

その老齢のものが久々に会えば先ずアンタ、オイクツニナラレマシタエ!

全幅の互いを労る言葉。お互い肩を抱き合いたいほどの気持ち。それがこのときの「道徳 いくつになるぞ」

そしてそれに続いて蓮如の言葉は一つ。

「道徳 念佛もうさるべし」「道徳よ お念佛申そうなー」

お説教したのではない。歳おいたふたりが肩だきあつて

「お互い お念佛申そうなー」

今となつてはそれより外にない。体力も落ちた。気力も最近とみに衰えてい。頑張ろうと思っても、踏ん張りがきかない。人の言うことに反発する気力も失せた。また、この世のことに関わつても仕方ない。腹もたたなし、まあどうでもいいという気になつてしまふ。

そういう自分を持て余す昨今。

喪失感、虚脱感。

そんな自分が情けない。

しかし、そういう私を彼方から奮い立させてくださる呼び声。弥陀ご永劫からのご本願の声。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。この声を聞き。この声を称える。私にはそれがしかない。

「道徳 念佛もうさるべし」

「ご一代記聞き書き」には、そのあとに、自力他力の分別が書いてあるが、これは恐らくのちの記録者かだれかが、蓮如上人のおころを忖度して書き加えたものであるかもしない。

もう一度、『蓮如上人ご一代記聞き書き』を、読み直して見よう。

青柿 熟柿を弔う

青々と未熟な青柿が、熟して落ちて行く熟し柿を見て、「ご愁傷さま」などと生意気にあざ笑う風景はどこの職場にも見かける。先輩上司を尊敬せずむしろあざ笑いきみの現代の若者社員。

「數をつついで蛇を出す」の簡略表現。しなくともよいようなことをして、災いを招く。「寝た子を起こす」。「雉も鳴かずば撃たれまい」などもほぼ同じ言葉。

数蛇 (やぶへび)



除夜会ご案内

十一月一日～十二月一日

十一時 年越しのおつとめ

横山	堀田	奥小谷
十一月二十三日	十月三十一日	儀式
豊臣	年越しおつとめ	さま

市場

八十歳

八十五歳